慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	記憶の科学：イアン・ハッキングの「歴史的存在論」を手がかりに
Sub Title	On sciences of memory : according to Ian Hacking's "Historical ontology"
Author	浦野, 茂(Urano, Shigeru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.117 (2007. 3) ,p.245- 266
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to understand Ian Hacking's arguments on sciences of memory. Exploring the development of the modern multiple personality movement, Hacking found its roots in the sciences of memory that emerged in the late 19th century. The focus of his arguments is on process in which multiple personalities, the new kind of people, emerged through "looping effect", that is, interaction between sciences of memory and people. Through following his arguments on this looping effect, this paper is to consider the way to describe the relation between human experiences and human sciences.
Notes	特集記憶の社会学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

記憶の科学

——イアン・ハッキングの「歴史的存在論」を手がかりに——

浦　野　　茂*

On Sciences of memory: According to Ian Hacking's "historical ontology"

Shigeru Urano

The purpose of this paper is to understand Ian Hacking's arguments on sciences of memory. Exploring the development of the modern multiple personality movement, Hacking found its roots in the sciences of memory that emerged in the late 19th century. The focus of his arguments is on process in which multiple personalities, the new kind of people, emerged through "looping effect", that is, interaction between sciences of memory and people. Through following his arguments on this looping effect, this paper is to consider the way to describe the relation between human experiences and human sciences.

* 青森大学社会学部

1. はじめに

私たちが具体的な何者かとして，どのような経験や実践を持ちうるかは，どのような概念が私たちにとって入手でき，また実際にどのように用いられているかという事柄と分かちがたく結びついている．たとえば選挙制度のない社会には有権者は存在しえない．またこの制度についてなんら概念的知識を持たない者が投票することはできないし，また投票しようと望むこともできない．こうしたことは，行為と経験の可能性と概念的知識との関係についての論理的な事実である．そしてI. ハッキングによると，同じことは多重人格障害という病にまつわる諸経験や，多重人格者という存在そのものにも，あてはまるという．

ともすると多重人格障害という病は，患者や医師，家族などの周囲の者が持つ概念的知識とは関係に存在するものと考えられるかもしれない．しかし，一定の概念的知識を前提にしてはじめて，こうした病やそれにまつわる様々な経験，さらには患者の存在そのものがありえている――このように，彼の著書『魂を書きかえる (Rewriting the Soul)』は論じていく (Hacking 1995). これによると，多重人格障害という病やその患者，またこの病をめぐる道徳上の政治という20世紀後半の北米社会の経験は，ある経緯で現れた記憶にかんする概念的知識を基盤としながら，またそれゆえのある特徴を帯びつつ，成立しているということになる．

以下では，多重人格と記憶の諸科学をめぐるこうしたハッキングの叙述をたどることになる．そのさいに筆者が念頭においている課題はふたつある．たがいに結びついているのだが，それぞれ簡単に述べておきたい．

第一は，社会生活における記憶にかんする概念的知識のポテンシャルを対象化することである．私たちの社会生活は，記憶をめぐる様々な概念的知識のうえに成立している．そもそも一定の能力を記憶の能力として概念化することにはじまり，そうした概念化にもとづいて，またこの能力を用

いることで，人格の諸相から集合的生活までにいたる多様な領域における諸経験を作り上げ，また論じている．この時，私たちがもつこうした諸経験は，記憶についての概念的知識によって一定のかたちへと成型されていると言えるだろう．したがってこうした諸経験について，それらがどのような概念的知識を前提としまた用いることを通じ，どのような特徴を帯びることになっているのかを，それぞれ問う必要があるだろう．

第二に，こうした作業をおこなうにあたり，記憶について語られ述べられてきた事柄をも，経験とのかかわりのなかに置きながら，対象化していく必要がある．記憶についてのこうした言説は，記憶をめぐる概念的知識に一定の変更をくわえ，またあらたに作り上げていく．そしてこうした概念的知識とのかかわりのなかで，私たちの経験は成立しているのである．この意味で，記憶についての言説を，その作動のかたちにおいてとらえ，それが概念的知識の一片として私たちの経験を支えていく経路を対象化していくことが，必要になる．

こうした課題に臨みつつも，以下での作業はハッキングの叙述をなぞるというささやかなものとなっている．したがって本稿は，上記の著書をめぐる，いささか遅れてやってきた注釈にとどまることになるだろう．

2. 記憶-政治学

多重人格障害は1980年代以降の北米において，その患者数を大幅に増加させ，一種の流行病となっていった．たとえば1972年の時点ではごく稀とされてきたこの病の患者数は，1992年になると「北米のある程度の大きさの町であればどこでも，何百という治療中の多重人格者がいた」という状態にまで至ったという (Hacking 1995: 8)．患者のこうした増加の背景にあるのは，この病の「原因」をめぐっての意識覚醒と告発という道徳にかかわる政治運動であり，したがってこの運動は一定の成功をおさめたということになる．

この病の「原因」とされたのは，患者の幼時における被虐待経験である．この病に好意的な専門家は（そして場合によれば患者当人たちも），この「原因」をおおむね次のように説明する．すなわち，家庭や宗教的カルトにおいて虐待を受けた経験は，心理的外傷となって被虐待者の人格の解離をもたらし，これが多重人格障害に帰結する．したがってこの病の治療は，患者にこの外傷経験を想起させて人格を再統合することによって，成し遂げられるということにもなる．

1970年代に作られたこうした「病因論」が，すでに問題化されていた児童虐待（および性的虐待）と多重人格運動とを結びつけることになる．一方で，多重人格運動は，すでにそれじたいで問題視されていた児童虐待を原因に据えることで，この流れに寄生しつつ一般に浸透していく．他方で，児童虐待の問題の側からみても，こうした多重人格の「病因論」には利用価値があった．児童虐待の問題は，家族の理想像や信仰という価値判断にかかわってくる．児童虐待がなぜ問題となりうるのか，そして虐待を引き起こす家族やカルトのどこが問題か，そしてこの問題にいかに対処すべきか――こうした論議はつねに一定の価値判断を前提にせざるをえず，それは解決不能な価値論争を招かざるをえない．これにたいして，多重人格の「病因論」はこうした論争の表面化を防いでくれる．家族の価値や信仰の問題に代えて，多重人格という病によって，すなわちそれが引き起こす結果としての病理によって，児童虐待は問題化されていくのである．

このように児童虐待と結びつくことによって，多重人格という病は道徳にかかわる政治運動を生み出していく．多重人格の原因となる外傷的経験を想起することは，治療において必要となる．しかし想起される当の経験には，多重人格との結びつきにおいて問題とされ，非難されるべき事柄が含まれている．したがってこの想起は，虐待の告発へとつながっていき，またつなげるべく意識覚醒がおこなわれる．こうして忘れられた経験の想起が，政治的運動の核心をかたちづくっていくのである．

他方，想起を通じてのこうした政治運動にたいする対抗運動も現れる．1992年に虚偽記憶症候群財団というロビイスト集団が設立され，この財団は虐待のかどで非難や告発を受けた被疑者を支援していく．この対抗運動からすると，非難や告発のもととなる想起された虐待経験とは，セラピストやカウンセラーと患者との間で作りあげられた偽りの記憶であるとされる．そしてこうした主張の根拠として参照されるのが，記憶についての一連の「事実」である．たとえば，抑圧ゆえに忘却された経験がのちに想起されるという多重人格の病因論の反事実性への批判的論点や，記憶を過去の経験についての再構成とする論点などが，そこには含まれている．

このように，虐待の記憶を想起することを通じた治療と告発が一方にあり，他方にこの治療と告発の虚偽性を指摘しつつ家族の回復を唱える対抗運動がある．この道徳をめぐる政治的対立は，しかしいずれにしても記憶についての知識を前提にして成立している．一方は多重人格の病因論であり，他方はそれに批判的に対峙する諸事実である．いわば記憶についての一連の事実の存在という前提のうえで，道徳的政治という経験が成立しているのである．こうした経験をハッキングは「記憶-政治学 (memoro-politics)」と名づけ，それについて次のように問いかけていくことになる．

> どのようにして私たちはこのような場所に，すなわち忘却がイデオロギーの中心的争点になるような場所に，たどり着いたのだろうか (Hacking 1995: 126).

3. 記憶という実定性

ここでハッキングは，記憶-政治学と名づけられた多重人格をめぐる道徳的政治の経験について，その成立の由来を問うている．しかし，そもそもなぜこの政治がほかでもなく記憶-政治学と呼ばれなければならないの

だろうか．そしてその成立を問うにあたり，この政治と記憶という対象領域との結合にはどの程度の必然性が見込まれているというのだろうか．

この問いにたいするありうる答えのひとつは次のようなものである．すなわち，保守主義者やフェミニスト，精神医学の権威や草の根のセラピスト，また大半が女性であるといわれる多重人格者など，相異なる立場の者たちが父権主義的な家族のあり方とその暴力をめぐって争う途上で，記憶という対象領域が浮上したという見方である．じっさい，J. L. ハーマンによる理解はそのようなものである．彼女によると，20 世紀後半のフェミニスト運動が性的暴力と家庭内暴力とを問題化するなかから，心的外傷という記憶の領域が争点として公衆の意識に浮上してきたということになる (Herman 1992＝1996: 7). ここでは記憶という対象領域は，すでにその外に存在している政治や権力関係のなかから浮上し，またそのなかで参照されるひとつの挿話という位置をしめることになるだろう．

しかしこうした説明では，これらの政治がなぜほかでもなく記憶という対象領域を対立の場所としなければならないのかは，不明なままである．たとえば児童虐待が，多重人格の病因論という記憶の領域を通じて問題化されていく経緯について，先に触れた．しかし，なぜほかでもなく記憶という対象領域を通じてそれがなされねばならなかったのだろうか．こうした説明では，記憶という対象領域があらかじめ自明の前提とされている．したがってそれがどのようなポテンシャルを宿しており，どのような論理で政治と結びつきえたのか，またこの結合ゆえにこの政治にどのような特徴がそなわることになったのかが，問われていないのである．

したがってむしろ，事態は逆からみるべきなのだろう．すなわち，記憶という対象領域はそもそもどのようなポテンシャルを宿し，またそれがいかにしてさまざまな人びとをしてこうした政治へと導いていくことになったのかが，問われねばならないのである (Hacking 1995: 126). こうした認識のもとにハッキングが向かうのが，記憶という対象領域の存在そのも

の――記憶の実定性――とその由来なのである．

記憶という対象領域が存在するということは，記憶についての一連の諸命題が存在していることと言いかえることができる（そして記憶についての事実とは，こうした命題のなかにあって真とされた命題のことになるだろう）．なおこうした一連の諸命題が存在するためには，その真偽に先立ち，そもそもそれらが有意味な命題である必要がある．したがって記憶という対象領域が存在するということは，言いかえれば記憶についての命題を，その真偽の判断に先立ってそもそも有意味に言いうる可能性のことであるといえるだろう (Hacking 1995: 198f.; 1999: 171). このような意味で，記憶の実定性とその由来への問いとは，記憶についての一連の命題を有意味なものとする「概念の文法」とその出現の様態への問いとなる．そして，人びとを道徳的政治へ導いていく記憶のポテンシャルが明らかにされていくのは，この問いを通じてなのである．ここでは，記憶の実定性が政治へと結びついていくその論理を簡単にまとめておこう．

第一に，心理的外傷が記憶の抑圧と忘却を引き起こし人格の断片化に帰結するという，多重人格の病因論の命題を考えてみよう．この命題は，事実問題以前に，そもそも記憶と人格との概念的結合の有意味性を前提としている．そしてこの結びつきを有意味なものと私たちがみなしていることは，たとえば私たちが記憶と身体のどちらに人格の同一性の規準を求めたくなるか振り返ってみれば――たしかにこの二者択一に無理があることはもっともだが――わかるだろう．もちろん，これは人格を記憶の連続性によって定義づけるJ. ロック以来の古くからの概念の文法だ．そして記憶状態と断片化した各人格とを対応づける多重人格の理論にしても，この文法がなければありえない．

しかし第二に，これにくわえて重要な点は，この病因論において外傷的経験は，忘却されつつも人格の断片化というかたちでその作用を継続しているとみなされていることである．つまり記憶が，意識の外においてなん

らかのかたちで作用し続けているということである．そしてそう考えることができるためには，記憶はじつは何らかのかたちで脳などの身体状態に関係づけられている必要がある．たとえば経験が，記憶痕跡のようなかたちで身体に痕跡として保存されており，したがってその経験が忘却されたとしても潜在的に作用を継続しているというかたちにおいてである(Hacking 1994: 46). これを指してひろく「記憶の生物学的対象化」と呼ぶこともできるだろう[1]．そして記憶が身体上のどのような対象として具体的に定位されるかはともかくとして，外傷的経験が忘却されつつも作用を継続しており，またそれゆえにこの経験の想起を目指すという多重人格の治療にみられる営為は，記憶についてのこのような対象化のうえに成立しているのである．

すでに人格と概念的に結びついていた記憶が，このように生物学的なものとして経験的対象とされていく．この地点が多重人格の病因論の成立の可能性となっている．ここにおいて多重人格とは，人格の外部に由来する外傷的経験を原因とする記憶の病として把握されることになるだろう．すなわち，精神的な苦悩は，多重人格の病因論を通じて科学的にその原因と発生の仕組みが解明される，心理的痛みへと置き換えられることになる．これにともない，この原因とされる経験である虐待を問題視するさいの議論の平面も，倫理から科学へと移行していくことになる．すなわち，それじたいで非難され論じられるべき倫理的問題としてではなく，結果的に生じる病理とのかかわりにおいて功利主義的に問題化されていくことになるのである．

ちなみにハッキングによると，こうした文法が成立したのは19世紀後半のヨーロッパにおいてである．こうした文法は，フランスでは反教会的な運動の展開という状況のなかでまたその展開として，精神や魂という超越的な領域を科学の対象として語るための拠り所となっていったのである．したがって，多重人格をめぐる道徳的政治は，ちょうどこの時に現れ

た記憶-政治学という「可能性の空間」のなかに，成立していることになる (Hacking 1995: 219f.). そしてそのかぎりにおいてこの政治は，それに参与する者に一定の構えをとることを不可避的に強いることになる．すなわち，

> 現在，精神にかかわる事柄についての道徳的論議をおこなおうとした場合，主観的意見は民主的に放棄させられる．そのかわり私たちは客観的事実へ，科学へと移行することになるのである (Hacking 1995: 220).

かりにこれを踏み外して虐待の道徳的是非について直截的に論じようとしても，公的な論議の場からは除外されざるをえない．虐待の道徳的是非をじかに論じることそのものが誤りだというわけではない．また，論議において交わされる意見内容やその根拠が一般に変容したという単純な理由でもない．そうではなく，虐待の道徳的是非やさらには人格にかかわる道徳的問題一般を論議する平面じたいが，記憶という実定性と記憶-政治学の成立とともに，その位置をすでに移動させてしまったというのが実情なのである．

4. 多重人格者と想起の実践

こうした可能性の空間の中心に位置するのは，多重人格者である．この人びとは，この空間のなかでただ一方的に対象化され，受動的に産出される存在というわけではない．一定数の人びとがこの空間と種極的に関わりをもち，またみずからがこの空間の一片として加わっていくこととしてみずからを作り上げていった結果でもある．

たとえば精神的苦悩を抱えた人びとにとり，多重人格にかかわる一連の概念は，その病因論を含めて，みずからを把握するさいに利用可能な資源

のひとつである．そのための場はセラピーや自助グループなどにおいてすでに制度的に用意されている．またそれだけでなく，上記のような人格と道徳的問題を論ずる平面の移動ゆえ，かつての虐待経験をめぐって告発や非難をおこなう人びとをしてこれらの資源へと向かわせていくという事情も存在する．

それでは，こうした資源が人びとによって使用される仕方はどのようなものだろうか．この点についてのハッキングの叙述はごく一般的なものにとどまっているが，それをまとめておこう．

多重人格のセラピーや自助グループは，精神的苦悩を抱えた人びとが自身の過去を想起することからはじまる．いわば現在の精神的苦悩を出発点にして，そこから自身の過去を振り返ることがおこなわれていく．そして多重人格の病因論は，こうした想起の資源となっているのである．すなわち現在の自身を多重人格者として位置づけたうえで，この病因論にのっとりながら，多重人格者としての現在の自身をもたらせた「原因」となる幼児の虐待経験が探し求められ，また結果として虐待経験が想起されていくことになる．

ただしここで想起される虐待経験とは，現在から振り返られた過去の世界にみいだされる経験である．言いかえればこの経験は，多重人格の病因論によりながら自己を多重人格者として位置づけることから，論理的にあるはずのこととしてあらかじめ前提とされているのである．そしてこうした前提のうえで，虐待経験が探し求められ，またそれに対応しそうな経験にたいして虐待という概念があてはめられていくことになる．この意味において，多重人格者として自身を位置づけることと，過去におけるある経験が虐待として記述できることとは，別個の独立した事柄とはいえない．したがってこうした想起がおこなっていることは，自身を多重人格にした原因を特定することではなく，実際には，むしろ病因論にのっとりながら自己の来歴を多重人格者として語り直していくことなのである[2]．

こうした語り直しにおいて，過去の経験は，かつては存在しなかった（もしくは入手できなかった）概念によって記述し直され，過去の経験が虐待という様相を帯びてあらたに現れる．こうしてこの人びとは，病因論にのっとりながら，またこれに適合するものとして経験を記述し直していくことで，多重人格者であることを自己成就的に確証していくことになる．もちろん，事態は自己理解のみにとどまらない．想起された虐待は，現在の苦悩を，言いかえれば多重人格を患う自身のあり方をもたらせた原因として，非難され告発されるべき事柄という様相をあらたに帯びていくことになるのである．

5. ループ効果

多重人格者とは，このように一定条件におかれた人びとが多重人格に関わる一連の概念と接することで，その存在を得ている．とりわけその病因論は，多重人格者という存在のあり方を支えるひとつの資源となっているのである．そしてこのように産み出される多重人格者は，まさにその存在を通じて記憶-政治学の一片を形成していくこととなるのである．

なお，人間科学の諸概念が人びととのあいだに持つこのような関わりについては，ハッキングが「ループ効果 (looping effect)」として一般的に論じている部分である．したがって次に，ループ効果という概念について明確にしておこう．

私たちが何者でありえ，またどのような経験と実践を論理的に持ちうるかは，私たちにとって入手可能な概念とともにある．逆に言えば，概念の入手可能性の変容は，存在のあり方と経験や実践の可能性の変容でもある．そして人間科学が一方でつねにこうした概念の入手可能性を考慮しながらその記述をつくる必要性を配慮しつつ，他方でまたこれに積極的に働きかける営為として存在してきたことは，数々の方法論争や調査研究を導いてきた実践的関心を顧みればわかるだろう．そしてループ効果とは，人

間科学の言説が，その作動において人びとにとっての入手可能な概念のあり方に影響をおよぼすことでその人びとの存在のあり方や経験と実践の論理的可能性を変容させ，またそのことが初発の概念をも変容させていく一連のプロセスのことである (Hacking 1996). 一例として，ふたたび多重人格の事例に触れておこう.

北米において多重人格障害の診断が若干の精神科医によっておこなわれはじめたのは 1970 年代だった．当初のこの病の典型的症例（プロトタイプ）では，患者は 2, 3 の人格を持つ程度とされてきた．しかしこの状態も，すでに触れたよう多重人格の原因把握の試みと病因論の確立とともに，大きく変化していく．たとえば，こうした病因論がセラピーなどの治療の場や自助グループへと組み込まれ，そこではより数多くの人格を引き出すことがおこなわれていく．またそれとともに，こうした病因論はメディアを通じて一般に流通していくことで，常識的知識として一般の人びとが自身を把握するさいの資源として使用されていくことにもなる．結果，1980 年代には患者は平均して 17 もの人格を持つようになるに至り，これが症例へとフィードバックしていくことでこの病の新たな典型的症例となっていくのである (Hacking 2006: 23; 1995: chap. 2; 1996: 357f.).

こうしたループ効果の一連のプロセスにあって，一方で，人間科学の言説は人びとの経験と実践の論理的可能性に積極的に介入することを通じて人びとの実践と経験を変容させていく要因となっている．他方で，まさにこのことじたいにおいて，この言説はその概念と内容を変化させていかざるをえない．ループ効果におけるこうした双方向的変容を指して，ハッキングは「人間の不確定性原理 (principle of human indeterminacy)」と呼んでいる (Hacking 1995: 66)[(3)].

ここで重要なのは，この不確定性という語に込められた意味である．この不確定性は，まずは人間の経験や実践と人間科学の言説との間に生じる動的関係を名指したものであると言える．ただしこの関係の動的な性格と

は，両者の関係に内在的なものであり，誤謬や虚偽といった外在的理由に由来するものではない．そうではなくこの動的性格とは，ループ効果という，人間とそれについての言説との相互作用ゆえのものなのだ．そしてこの意味において，こうした動的性格からは，人びとの存在とその言説についての恣意性や虚構性といった論点を読み取ることはできない．

ループ効果と従来のラベリング論（さらには構築主義）の発想との異同が明確になるのも，この点においてである (Hacking 1999)．彼じしんによる理解に沿いながら整理しておこう．

たとえば T. J. シェフは，精神科医などの専門家と患者との社会的過程を分析しながら，そのなかでおこなわれる精神病というラベリングこそが人びとを精神病患者の役割へと導いていく点を主張していた (Scheff 1966＝1979)．こうした分析は，精神病の概念を対象としながらも，その焦点を相互行為とそのなかでの自他認識においている．また，身体上の病因を想定する医療モデルに代えて偶然的な社会的過程における社会的原因を提示していくことで，精神病にたいして反実在論的な批判をおこなうことが，分析の眼目だったといえる．

したがってラベリング論の特徴を列挙すると，次のようになるだろう．まず分析の焦点は，既存の概念の存在を前提にしながらそれが使用される相互行為へと分析におかれている．そしてこのもとにおいて，精神病患者の産出メカニズムについての代替的な具体的仮説が提示され，これを通じて医療モデルへの反実在論的な批判が展開されていく．

他方，ループ効果の視点はどうだろうか．

まず分析の焦点については，具体的な相互行為的過程を含みつつも，むしろ概念そのものとその存在・変容の条件におかれている．すなわちその射程は，人間科学における概念とその出現の条件，そしてその概念が人びとの経験と実践の論理的可能性と関係づけられることでこれを変容させ，またそのことが当の概念の変容の条件となりうるという一連の過程の可能

性である．したがってループ効果とは，概念変容や経験と実践の変容の論理的な可能性を指ししめす視点にすぎない．言いかえれば，概念や経験と実践などの変容の具体的道筋を描くような仮説ではないということだ(Hacking 1996: 370)．それゆえ，かりに主題が精神医学上の病であったとしても，代替的仮説を提示することで病についての反実在論的な批判が展開されるわけではない．つまりこの視点は，実在論か反実在論かといった論点にたいして無関心を貫いているのである．また，かりにこうした論点が問題になるとしたら具体的な場における具体的争点として，したがって叙述すべき現象の一片としてであってそのかぎりのものとなるだろう(Hacking 1995: 16, 83; 1996: 366).

ループ効果という視点の焦点にあるのは，人間科学の概念と人びとの経験や実践との論理的関係と，その変容である．この問題は，身体上の病因の存在の有無とまったく無関係というわけではないものの独自の水準にある．したがってこうした変容が，身体上の病因の否定に直結するわけではない．また反対に，こうした変容が，身体上の病因の発見とそこからもたらされるあらたな治療・施療法の導入を介して成し遂げられるということも十分にありうるということになる (Hacking 1997; 1999: chap. 4).

6. 過去の不確定性

多重人格者という存在は，多重人格にかかわる一連の概念やその病因論が，一定数の人びとにとって入手可能な概念的資源となり，じっさいに想起の実践において用いられていくことを通じて，産み出される．したがってこの存在は，実定的領域としての記憶を背景にしながら，ループ効果の過程のなかで，またそのなかでのみ存在し[4]，またそのことで記憶–政治学の経験を形成していくのである．

なお，記憶–政治学の経験をかたちづくっているこのような論理と由来は，またそれゆえにこの経験に独特の特徴を帯びさせることにもなってい

る．その特徴とは，想起を通じた告発やそれにたいする告発された側による弁護や反批判の応酬が帯びている，ある種の混乱のことである．

多重人格の病因論を資源とした想起が遡及的再記述のかたちをとっていることは，先にみたとおりである．このことゆえ，この想起がおこなっていることは，かつての出来事や経験をかつては存在しなかった（もしくは入手できなかった）概念によって語り直していくことである．想起の主体は，当時も嫌悪感などの微妙な感情を持って受け止められていた――しかし虐待という概念のもとでは把握されていなかった――経験について，のちに多重人格の病因論に接するなかで，児童虐待としてあらたに把握し直しながら想起していくのである．そしてこうした想起を通じて，その経験を引き起こした者に，虐待の意図を投影的に帰属し，非難と告発をおこなっていくことになる．これにたいして非難や告発を受けた被疑者の側は，こうした想起の虚偽性の指摘をもって，これに応酬していくことになる．

この応酬は，一見するとわかりやすいものだが，しかしある混乱のうえに成立していることを見逃すべきではない (Hacking 2003: 123). 非難や告発を構成するこうした遡及的再記述のひとつの特徴は，その真偽を確定することはできないことにある．たしかに，のちになって現れた（もしくは入手可能になった）概念は，かつては別の概念のもとに把握されていた経験にたいして適合しているかもしれない．この表面的な意味で言えば，のちに現れたこの概念による記述は真であろう．しかし当時の時点の世界においては，そもそもこの概念は入手不可能であった．そのうえさらに，G. E. M. アンスコムにしたがって，意図的行為とは，行為主体によってある概念による記述のもとで把握されている行為のことだとしてみよう (Hacking 1995: 234, Anscombe 1957＝1984). すると，この当時の世界において意図的に虐待をおこなうことは論理的に不可能であることになる．とすれば，虐待という概念によるこの経験についての記述と，またそ

れを引き起こした者の行為を意図的な虐待行為とする記述とを，それぞれ真とする条件は，当時の時点には存在していなかったということになる．ということはまた，この記述を偽とする条件も同様ということになる．すなわち，

> こうした再記述は，過去について完全に適合するかもしれない．つまりそれらは，私たちが現在において断言している真実なのである．しかし逆説的ながら，それらは過去において真実ではなかったのかもしれない．つまり，その行為がなされた時点において有意味だった意図的行為についての真実ではなかったかもしれないのである (Hacking 1995: 249).

この意味で，こうした非難と告発の応酬のなかに現れる過去は，不確定性という特徴を帯びることになる．一見するとこの応酬は，あたかもそれぞれの主張の真偽が確定できるかのような前提に立って，おこなわれている．しかしにもかかわらずこの応酬は，その真偽を確定する条件が当の過去には不在のまま，あたかも空回りしているかのような混乱した様相を呈することになるのである(5).

7. 歴史的存在論

これまでの議論を振り返っておこう．

出発点は多重人格をめぐる道徳的政治という経験だった．そしてこの道徳的政治には，記憶についての科学的知識を不可欠の前提として成立しているという特徴がみいだされた．あたかも記憶についての科学的知識が存在し，またそのうえでなければこの政治に参与することができないかのように，である．この点に注目する以上，この政治について，その外にあらかじめ存在することが想定される政治的立場にもとづいて把握していくこ

とはできない．そうすることは，この政治の経験をその積極的で独自の様相のもとに把握することを妨げ，かえってそれらを霧消させてしまうことになるだろう．

この問題意識ゆえにハッキングが向かうのは，この記憶についての科学的知識が存在するという事態そのもの――記憶の実定性――であり，このなかに政治的なポテンシャルが確認されていく．いわば多重人格をめぐる道徳的政治は，このポテンシャルのうえに，そしてこのポテンシャルを具体的な想起のなかで使用していくことを中心として，存在しているという点が，人間科学の言説とその対象との相互作用という視点からあらためて把握されていくことになる．

結果として確認されたのは，この政治の経験が帯びている混乱した様相と，またそれを成立させている記憶の実定性という背景だった．この政治は，過去のある経験の道徳的是非をめぐって争われている．それは必然的に想起を通じての政治となるが，そのさいに，こうした想起の前提として多重人格の病因論が使用されているのである．言いかえれば，記憶の実定性を背景としたこの病因論こそが，こうした政治の経験を存在させていたということになる．

このようにハッキングの叙述は，多重人格をめぐる道徳的政治の経験から出発しながら，この経験を成立させている概念的諸前提とその由来を明らかにしていく．そしてこうした方針を指して彼は，M. フーコーに由来する「歴史的存在論(historical ontology)」という名をあてている(Foucault 1984: 45＝2002: 19, Hacking 2002: 23). この方針は，人間科学の概念について，知識と関係そして自己について私たちがもつ経験の論理的前提の歴史的変容との関わりのなかで，その使用を分析・記述していくものである．

もちろん私たちの経験を成立させている概念的諸前提は，人間科学の諸概念にとどまらない．いやむしろ，それらは，実際の使用にあたって様々

な常識的知識のなかに埋め込まれて私たちの経験と接しているというM.リンチの指摘は無視できないものであるはずである(Lynch 1995; 2001). 実際，ハッキングの叙述をみるかぎりこの点への留意はごくわずかであることは否定できないだろう．ただし彼の視線は，常識的知識に埋め込まれつつであれ，そのなかで使用されている当の概念的諸前提の存在とその変容に向けられていることに注意すべきだろう．言いかえれば，彼の叙述からは，人間科学を，その作動において捉えていくことを通じて，現に存在している私たちの経験の一片をかたちづくっている積極的な現象として取りあげていく視点をこそ，読み取るべきだと思われる(Hacking 2004).

言うまでもなく人間科学は，私たちの経験を積極的に構成する一部である．そしてこの側面を，方法論的議論によって解消してしまうのではなく，また後期近代のもつ制度的側面として外在的にのみ押さえるのでもなく，個々の具体的な経験の厚みに内在しながら掘り下げていく仕方を，ハッキングの叙述からは読み取ることができるように思われる．そしてこうした作業こそが，私たちの経験にそなわる論理的前提をひとつの可能性として見定め，またそれゆえにこれとは別の可能性へと私たちを繋げていく作業に通じていくものと，ひとまずは考えておきたい(Foucault 1984: 45＝2002: 19, Hacking 2002: 24).

付記　執筆にあたり，研究会における下記の方々との討論から多くを学んだ．ここにそのお名前を記して感謝の念を表したい．安藤太郎，石井幸夫，上谷香陽，喜多加美代，小宮友根，酒井泰斗，中村和生，前田泰樹の各氏.

注

(1)　「記憶の生物学的対象化」とはひとまず，身体という物質による保存の機能のレベルにおいて記憶を把握していく思考のことを指してい

る．そしてこの思考のうちには，解剖学的な記憶の局在化の研究にとどまらず，遺伝を生体の記憶現象とみなす有機的記憶論をも含めることができると思われる（Otis 1994, 浦野 2006）．なお，さらにまたK. ダンジガーによると，この思考は，意識的回想を還元して記憶を科学的に研究するための可能性の条件をなしている点で，H. エビングハウスの実験的な想起研究とも無関係ではない (Danziger 2001: 57).

(2) この点については前田 (2001) を参照．なお，野矢茂樹は「過去を振り返る」ことと「過去に立ち返る」こととを概念的に区別している（野矢 2005: 320）．前者は，現在の時点から過去の世界を振り返りみることであり，したがって現在までの世界の一部として過去を捉えることである．他方，後者はこの過去の世界をそれ以後の世界を一切含まないその時点における現在として捉える（あるいは捉えようとする）ことである．こうした区別のうえで，前者に立った，過去による現在の決定論のトリビアルな点を，野矢は指摘している．このことは，多重人格者が，現在から振り返りみられた過去の経験が原因となって現在の自己が決定されたと考えることのトリビアルさについても，あてはまるだろう．

なお，この論点はのちに触れる過去の不確定性にたいしても，重要な意味をもつものである．

(3) このように，人間科学における調査研究がそれじたいにおいてその対象を変容させるという論点において，「不確定性」という語が用いられていることに注意すべきだろう．のちに触れる「過去の不確定性」についてのハッキングの叙述の焦点も，あたらしい概念による遡及的記述から帰結する過去の不確定性一般について述べたものとしてよりも，まずは，人間科学と対象とのループに，具体的にいえば記憶の科学と多重人格者じしんによる過去想起とのループに置かれている

ものとして理解すべきであると思われる.

(4) ループ効果の過程のなかで，またそのなかでのみ存在する種を，ハッキングは「相互作用種 (interactive kinds)」と呼んでいる (Hacking 1997; 1999). これを彼はかつて「人工種 (human kinds)」と呼んできたが (Hacking 1986＝2000), いずれにせよこれらの概念は，人間科学における分類にたいしてなんらかのかたちで自覚的でありうる種一般のことを指している (Hacking 1997, 1999). なお，この種は，ループ効果ゆえに動的な性格を帯びていることになるが，だからといってこのことが，これらの種の非実在性を含意するわけではないことはすでに述べたとおりである．なお，ハッキングが自身を「弁証法的実在論者 (dialectical realist)」と呼ぶのも，こうした理由からである (Hacking 2002: 2).

(5) なお，こうした混乱にたいしてハッキングがとっている視点には，注目しておくべきだろう．すでにみたように，過去の事実が確定的であるという前提で成立しているかつての虐待経験をめぐる応酬が，にもかかわらずそれぞれの主張の真偽を確定できる条件が不在の状態のうえに成立している点を指して，彼は混乱と呼んでいる．彼は，この点を見定めつつもしかし，この混乱した経験じたいを積極的なひとつの現象としてとりあげ，それを成立させている論理と由来を記憶の実定性にまでさかのぼって解明していくことになる．この意味で，彼の視点は「混乱に寄り添う」ものとなっている (Hacking 2003: 123).

他方，過去の不確定性という概念についての批判的論評のなかで，W. シャロックと I. ロウダーらは，まず，この不確定性が過去の行為のかつての時点における記述とのちになされる再記述との間の区別を無視した概念的混乱によるものであることを指摘する．いわば過去の不確定性という概念を混乱として解消していくことになるわけだが，それとともにハッキングが取りあげていた混乱の経験じたいをも疑似

的な現象としてその存在を消去していくことにもなるだろう．したがってシャロックらの視点は，こうした応酬じたいについても，それを積極的現象として記述解明していくのでなく，むしろ批判的な介入を形成していくことになるように思われる(Leuder & Sharrock 1999; 2003, Sharrock & Leuder 2002; 2003).

このように両者は，同一の現象にたいして異なる視点から論じている部分があり，両者の是非を一義的に言うことはできない．しかし少なくともハッキングの議論についての論評としてみるかぎり，シャロックらの論評はハッキングの視点を汲み入れそこなっていると思われる．

文　献

Anscombe, G. E. M., *Intention*, Basil Blackwell.（＝1984, 菅豊彦訳『インテンション』産業図書.）

Danziger, K., 2001, "Sealing off the discipline," in Green, C. D., M. Shore, and T. Teo eds., *The Transformation of Psychology*, American Psychological Association, 45–62.

Foucault, M., 1984, "What is enlightment?" Rabinow, P. ed., *Foucault Readear*, Pantheon, 32–50.（＝2002, 石田英敬訳「啓蒙とは何か」『ミシェル・フーコー思考集成 X』筑摩書房, 3–25.）

Hacking, I., 1986, "Making up people," in Heller, T. ed., *Reconstructing Individualism*, Stanford University Press, 222–236.（＝2000, 隠岐さや香訳「人びとを作り上げる」『現代思想』28(1), 114–129.）

———, 1994 "Memoro-politics, trauma and the soul," *History of the Human Sciences*, 7(2), 29–52.

———, 1995 *Rewriting the Soul*, Princeton University Press.

———, 1996 "The looping effects of human kinds," Sperber, D., D. Premack, and A. J. Premack eds., *Causal Cognition*, Oxford University Press, 351–383.

———, 1997 "Taking bad arguments seriously," *London Review of Books*, 19 (16), 14–16.

———, 1999 *The Social Construction of What?*, Harvard University Press.
———, 2002 *Historical Ontology*, Harvard University Press.
———, 2003, "Indeterminacy in the past," *History of the Human Sciences*, 16 (2), 117–124.
———, 2004 "Between Michel Foucault and Erving Goffman," *Economy and Society*, 33(3), 277–302.
———, 2006, "Making up people," *London Review of Books*, 28(16), 23–26.
Herman, J. L. 1992 *Trauma and Recovery*, Basic Books. (＝1996, 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房.)
Leudar, I. & Sharrock, W., 1999, "Essay review: Multiplying the multiplicity," *British Journal of Psychology*, 90, 451–455.
———, 2003 "Changin the past?" *History of the Human Sciences*, 16(3), 105–121.
Lynch, M., 1995, "Narrative hooks and paper trails: The writing of memory," *History of the Human Sciences*, 8(4), 118–130.
———, 2001, "The contingencies of social construction," *Economy and Society*, 30(2), 240–254.
前田泰樹, 2001,「「心の時代」のなにが問題か？」『文明』85, 45–62.
野矢茂樹, 2005,『他者の声　実在の声』産業図書.
Otis, L., 1994, *Organic Memory*, University of Nebraska.
Scheff, T. J., 1966 *Being Hentally Ill*, Aldine. (＝1979, 市川孝一ほか訳『狂気の烙印』誠信書房.)
Sharrock, W. & Leuder, I., 2002, "Indeterminacy in the past?" *History of the Human Sciences*, 15(3), 95–115.
———, 2003, "Action, description, redescription and concept change," *History of the Human Sciences*, 16(2), 101–115.
浦野　茂, 2006,「社会学と記憶」『社会学評論』56(3), 727–744.